

☆リードの「幼稚園」の翻訳書が、宮本美沙子さんの訳によって出版されたことを大へんうれしく思います。リードのものにも「Kinder garden」という書物があったのかと思いましたが、原書が「The Nursery School」だったので嬉しく思いました。私としては「ナースリー・スクール」として、新しい幼稚園という副題にされた方がよかつたのではないかと考えます。幼児教育に対するナースリー・スクールの貢献、したがってその教育的価値は、従来の幼稚園とは異なるものだからです。

「幼児保育学校」という名称は、故青木誠四郎氏が、ハリエット・ジョンソンの実験報告書の翻訳のために選ばれたもので、私としてはハッピー・ネームだと思いました。私は「子供研究講座（昭和三年）でナースリー・スクールを紹介した際も「家庭とナースリー・スクール」という題にしたのでした。あなたの訳の後記に書かれたように「幼児保育学校」という名称は今日のように保育所の幼稚園化され普及された時点では、保育所や託児所の印象が強いということもありますけれども、私はナースリー・スクールというものの独自性を高く評価していたので、従来の幼稚園と区別する

意味でも、ナースリー・スクールという原名にしたのでした。この考えは今日でも変えていません。

日本幼稚園教育のナースリー・スクー化が特に今日必要だと考えるのに、わが国の幼児教育者たちのナースリー・スクールに対する関心があまりにも稀薄であると思えます。あなたは私の「ナースリー・スクール」をきかれたかきかれていなければよいと思うほど粗末なものでした。どうか知りませんが、わが国ではナースリー・スクールの文献としては、私のもののほかに大正末期に出た青木さんの翻訳があったばかりですが、大学の講座としては、私が日本女子大学で開設したものたつた一つあっただけでした。私も今年七十四才、半病人で余命幾ばくもありませんが、就学前教育学の一環として「ナースリー・スクー

## 書評

### 生活の係

フレール館

600円

## 上村哲弥

「をまとめることと、真に学問的体系を備えた『家庭教育学』を書きあげることだけは今年中にでもやりとげたいと願っています。私のナースリー・スクールは広い立場に立ち、そして歴史発達をふまえて書きますので、今日の進歩したアメリカのナースリー・スクールがどんなものでいかなる原理と方法の上に立っているかを知ってもらうためには、三、四のアメリカの文献の翻訳されることを熱望していました。そこにああなたの訳本が出たのですから、私は自分の講義の参考文献としても、また一般読者のための必読書としても安心して勧めることができます。あなたのような真摯な篤学の方がこの訳書を手がけられたことは本当にうれしいことです。

嬉しさのあまり冗漫な駄文となりまして。何卒おゆるし下さい。

（これは訳者に宛てられた手紙の一部である。

筆者が書評を書かれる予定のところ、病臥中であるので、これを掲載することとしたものである。）

☆カザリン・H・リード著「幼稚園」が、宮本美沙子氏の手によって翻訳された。原著は幼児教育関係の書物として稀にみるすぐれた書物であり、翻訳もまた忠実であり、読みやすい日本語で書かれている。すでに、世界数カ国語の翻訳が出版されており、世界的に定評のある書物である。このような書物が日本語になって子どもの手にはいるということは、本当にうれしいことであり、また、わが国の幼児教育界にとって、貢献するところ大であると思う。幼児教育の実際にたずさわる方は、これを読まれることによって、共鳴し、また思いあたるところも多く、しかもまた新たな眼で幼児に向うことができるであろう。これから幼児教育のことを学ぼうとされる方には、幼児の教育とは何かということ学ぶのに最適の手引書となるであろう。また両親にとっても、これは幼児期の教育を理解してもらうのに好都合のテキストである。

カザリン・リード女史が日本にこられたのは、すでに数年前のことであった。日本女子大学の宮本美沙子氏に案内されて、お茶の水女子大学の附属幼稚園を来訪されたが、ひとこと言葉をかわしただけで温かい雰囲気伝わってくる、白髪の美しい老婦

カザリン・H・リード著  
宮本美沙子訳

「幼稚園—人間関  
の場」について

昭和41年

人であった。

ここでは幼児のありのままの姿を見ることができる、といつてよろこばれ、また、自分の書いた書物の原理は、そのままこの幼稚園で実践されているといつて長時間を愉快に過していかれた。このことが機縁となつてこの書物が宮本氏によって翻訳されることになったのである。

翻訳されたものを見てみると、またつくづく、この書物がよく書かれていることに嘆息した。アメリカの子どもの実例で埋められているのであるが、それは、子どもの身のまわりの日本の幼児そのままである。みんながふれている例であり、あた

津 守 真

りまえのこのように書かれていながら、このように書物として表現することがいかにむずかしいことであるか。それを何のこだわりもなく書き流しておられるのは心にくいほどである。日本の幼児の例を引いて、日本の幼稚園の経験の中で同じような書物が書けてよいはずであるし、今後、このような堅実な理論に立った実践の書物が日本語の原著であられる日を望みたい。しかし、やはり、この書物の優秀さは、この書物そのものに帰せられるべきであろう。だけれども持つことのできる材料でありながら、ここまで表現することはむずかしいのである。

はじめに、この訳書は原著に忠実であると書いたが、ただ一箇所、厳密にいえば忠実でないところがある。それは、書物の題名である。原著は、「The Nursery School—A Human Relationships Laboratory」。「ナーリースクール——人間関係の実習場」である。これを「幼稚園」と訳するにあたっては、私に責任がある。訳者から、本の題名について御相談をうけたとき、私は直ち

に、「幼稚園」とすべきだと考え、それ以外にないと思つた。原著のナースリースクールは、二、三、四才を対象とした幼児教育施設であつて、厳密には日本にはない制度である。しかし、実際には日本の幼稚園は、三、四、五才を対象とする幼児教育施設であつて、アメリカのナースリースクールを実質的に包含している。アメリカでは幼稚園というと、就学前一年間の一年保育の部分だけをいうようになってきている。だから、キングダーガルテン・ブライマリー、すなわち、幼稚園および低学年と結びつけていわれることが多い。そして、そのような書物の大きな関心は、子どもの興味を中心とするカリキュラムの展開である。それに対して、ナースリースクールは、もっと幼児の人間理解を強調している。日本の幼稚園は、子どもの年齢からいっても、保育内容からいっても、この両者を包含している。

ナースリースクールを保育所と訳しているものもときどき見られるが、これは誤訳である。上村哲弥先生から御指摘いただいたように「幼児保育学校」とすれば最も忠実な訳であるが、日本には残念ながらそのような名称でよばれている施設はほとんど

ない。しかし、ナースリースクールで行なっていることは、実際には幼稚園で行なっているはずであるし、現行の制度では、日本の幼稚園はナースリースクールの機能を負わねばならないものである。

この書物の日本版への序文に次のように記されている。

「今日の世界は、危険も一ぱいあるが、また、新しい期待や望みも満ちあふれているのである。今日の世界は、かつてなかったほどに、もっともっと、お互いに人間として理解しあう必要にせまれている。……私たちが、もっと人間をよりよく理解できるようになった時にのみ『人間の、人間に対する残酷さ』から解放されて、すべての人類が到達しうる、より大きい人間愛へと転じ得る希望を、もつことができるのだと思ふ」

この書物が幼児教育関係の者にひろく読まれることによつて、日本の幼稚園はもっとよいものになり、日本の幼児はもっとよく育ち、日本の社会はもっと豊かな望みに満ちたものとなるのであろうことを確信している。この翻訳を短時日の間に立派に完成された訳者に深く敬意を表したい。

## 幼児の教育 第六十六巻 第二号

二月号 © 定価八〇円

昭和四十二年一月二十五日印刷  
昭和四十二年二月 一 日発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

東京都文京区大塚二ノ一ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一  
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番  
◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします